

出土遺物 全く出土していない。

時 期 棟軸方向から判断して、南構Ⅶ期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB59(附表11)

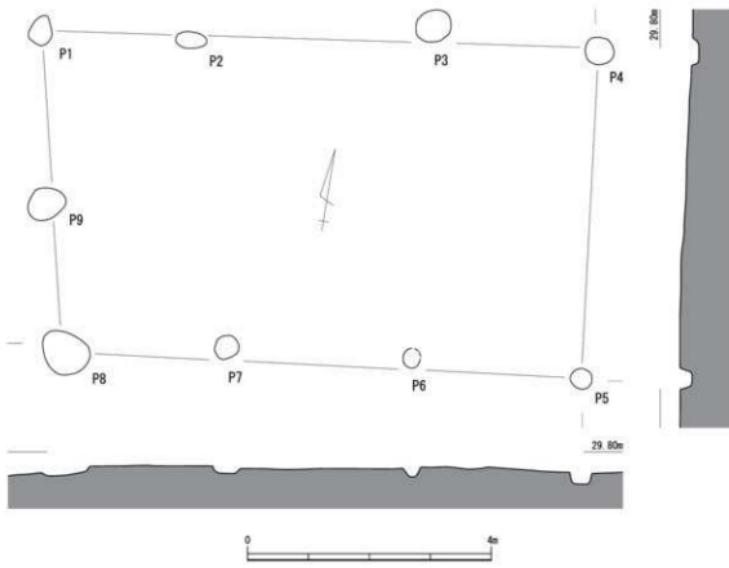
検出状況 建物群8の北側、SB58の南側に位置する(第155図)。SB60と一部平面的に重複しているが、切り合い関係は認められない。P9が土壤を切っている以外、他の遺構との切り合い関係は認められない。このため、建物全体が復元されている。

建 物 東西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間の帰柱建物である(第157図)。桁行・梁行ともに規模が異なり、梁行については平行関係にはない。このためやや歪んだ平面形をなしている。柱通りについても、全体的にも乱れが認められる。建物の規模は、北桁行(P1-P4)で9.15m、東梁行(P4-P5)で5.40mを測り、両者を基準とした面積は49.41m<sup>2</sup>である。北桁行を基準とした棟軸方向はN 83° 00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表11の通りである。

柱 穴 東梁行の中間柱を除く全ての柱穴が検出されている。各柱穴に平面形・規模において差が認められる。特にP8の規模が突出している。平面形は、P1とP2を除いては円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表11の通りである。

出土遺物 P6から土師器の甕が出土している。体部の小片で、図化はできなかった。内面はナデにより仕上げられ、外面には煤の付着が認められる。

時 期 出土遺物から時期の判断は困難である。建物の方位等から判断して、Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。



第157図 SB59

## SB60(附表12)

**検出状況** 建物群8の西側、SB62の北西側に位置する(第155図)。SB59と一部平面的に重複しているが、切り合い関係は認められない。他の遺構との切り合い関係も認められない。建物の北西部を中心に後世の擾乱を受け、全体は検出されていない。ただし、上記擾乱が東桁行と南梁行に及んでいないため、建物の規模等の復元は可能である。

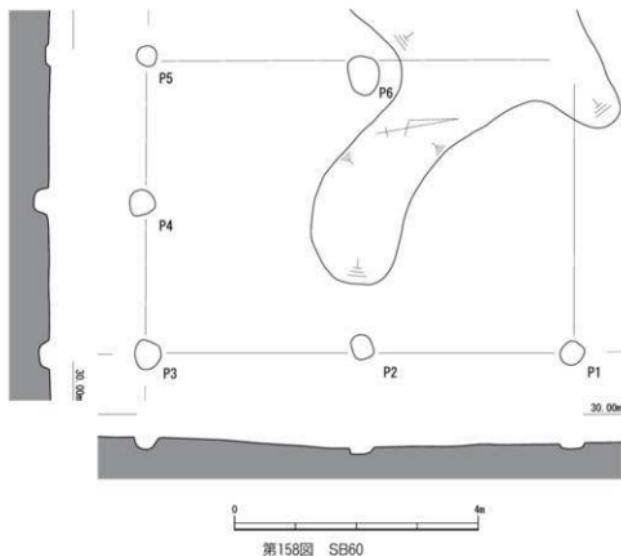
**建 物** 南北方向に棟軸をもつ建物で、桁行2間、梁行2間の側柱建物である(第158図)。後世の擾乱を受け北西隅の1穴を欠く。北梁行の中間柱についても残存していなかった。検出した範囲において、柱通りは良好である。

建物の規模は、東桁行(P1-P3)で6.90m、南梁行(P3-P5)で4.90mを測り、これを基準とした建物の面積は33.81m<sup>2</sup>である。東桁行を基準とした棟軸方向はN10°00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表12の通りである。

**柱 穴** P6を除いては、全体的には同規模の柱穴である。径30~40cm 大とやや小型の柱穴である。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂~細砂1層からなる。柱痕を検出した柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表12の通りである。

**出土遺物** P4から土器器の碗もしくは杯の体部片が出土している。小片のため図化できなかったが、内外面に赤彩が認められる。

**時 期** 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。



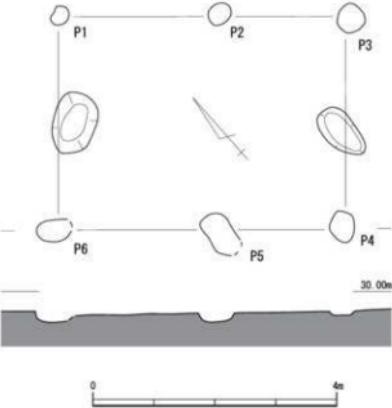
第158図 SB60

## SB61(附表12)

**検出状況** 建物群8の南西部、SB63の南西側に位置する(第155図)。他の建物との平面的重複、および切り合い関係は認められない。各梁行の中間柱が土壤に切られ検出できなかった以外、全ての柱穴が検出されている。この結果、基本的に建物全体が検出されている。

**建 物** 北西-南東方向に棟軸をもつ桁行2間の側柱建物である(第159図)。梁行については、各梁行の中間に土壤があり柱穴は検出されていないが、建物の規模から判断して、当初は柱穴があったものと考えられる。

したがって、梁行についても2間と考えられる。桁行・梁行ともに平行関係にあり、柱通



第159図 SB61

りについても乱れは認められない。南西桁行(P4-P6)で4.70m、南東梁行(P3-P4)で3.40mを測り、両者を基準とした面積は15.98m<sup>2</sup>である。南西桁行を基準とした棟軸方向はN48°30'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表12の通りである。

**柱 穴** 両梁行の中間柱を除く柱穴が検出されている。柱穴の平面形は、全体的に不整形のものが多い傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表12の通りである。

**出土遺物** P3から土器師の壺が出土している。体部の小片で図化はできなかった。内面はヘラ削り、外表面はハケにより仕上げられている。

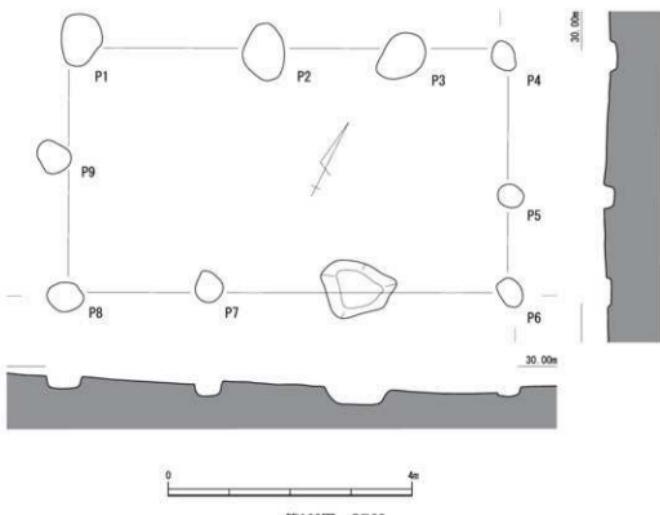
**時 期** 棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

## SB62(附表12)

**検出状況** 建物群8の中央部南側、SB59の南側に位置する(第155図)。P9がSB63のP2を切っている。建物全体が復元されているが、南桁行P6-P7間の1穴については土壤と平面的に重複し、検出できなかった。

**建 物** 北東-南西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間の側柱建物である(第160図)。桁行・梁行ともほぼ同規模で平行関係にあり、整った平面形をなしている。このなかで、南西梁行の柱通りについては乱れが認められる。北西桁行(P1-P4)で6.90m、北東梁行(P4-P6)で3.90mを測り、両者を基準とした面積は26.91m<sup>2</sup>である。北西桁行を基準とした棟軸方向はN63°00'Eを示している。各柱穴間の距離等は附表12の通りである。

**柱 穴** 南東桁行の1穴を除く全ての柱穴が検出されている。柱穴間に平面形・規模において差が認められる。平面形は、P1-P3の3穴については他より大型である。平面形は梢円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表12の通りである。



第160図 SB62

出土遺物 P2・P3・P7・P9から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

P2出土土器 土師器の甕の口縁部片が出土している。

P3出土土器 土師器の杯Aと把手が出土している。杯Aは底部片で、内面に赤彩が認められる。把手はその小片が出土している。

P7出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は杯と甕が出土している。杯は体部片が出土している。甕は体部片で、内面がヘラ削り、外側がハケにより仕上げられている。須恵器は杯B蓋の口縁部片が出土している。

P9出土土器 土師器の甕の体部片が出土している。内外面ともハケにより仕上げられている。

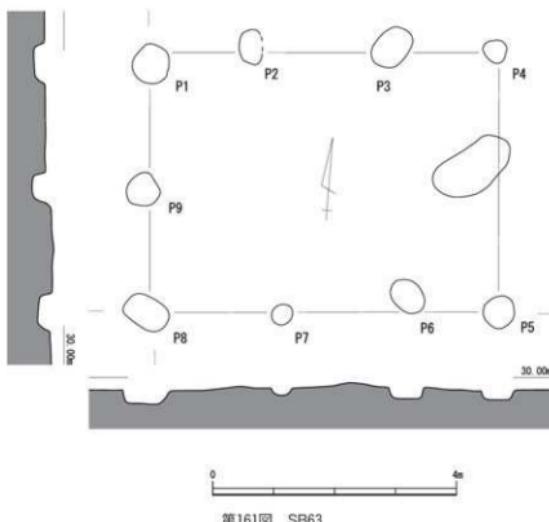
時 一期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB63(附表12)

検出状況 建物群8の中央部南端、SB61の北東側に位置する(第155図)。SB62と平面的に重複し、P2がSB62のP9に切られている。建物東側は土壤と平面的に重複し中間柱を検出することはできなかったが、建物全体は復元されている。

建 物 東西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間の側柱建物である(第161図)。桁行・梁行ともに同規模かつ平行関係にあり、整った平面形をなしている。南桁行(P5-P8)で5.80m、西梁行(P1-P8)で4.10mを測り、両者を基準とした面積は23.78m<sup>2</sup>である。南桁行を基準とした棟軸方向はN85°00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表12の通りである。

柱 穴 東梁行の中間柱を除く全ての柱穴が検出されている。各柱穴の規模はP4とP7を除いてほぼ同じである。平面形は、方形もしくは崩丸長方形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また、柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表12の通りである。



第161図 SB63

出土遺物 全く出土していない。

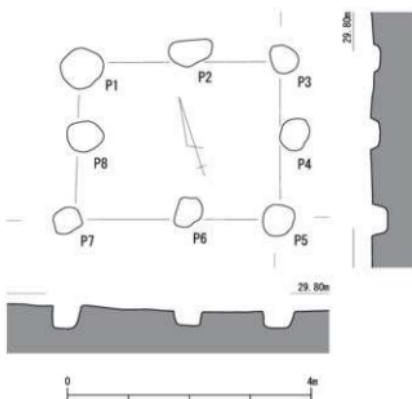
時 期 遺物が出土していないため、出土遺物からの時期の判断は困難である。棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB64(附表12)

検出状況 建物群8の東部、SB62の東側、SB65の北側に位置する(第155図)。他の建物および他の遺構との切り合い関係は認められず、建物全体が復元されている。

建 物 北西-南東方向に棟軸をもつ桁行2間、梁行2間の側柱建物である(第162図)。桁行・梁行ともにはば同規模で平行関係にあり、整った平面形をなしている。ただし、北桁行と西梁行の柱通りについてはわずかな乱れが認められる。南桁行(P5-P7)で3.45m、東梁行(P3-P5)で2.65mを測り、両者を基準とした面積は9.14m<sup>2</sup>と、小型の建物である。東梁行を基準とした棟軸方向はN18° 00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表12の通りである。

柱 穴 全ての柱穴が検出されている。



第162図 SB64

柱穴の規模はほぼ同規模で、平面形も隅丸方形傾向と類似する。特に各柱穴の規模については40cm~70cm大と、全体的に大型である。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表12の通りである。

**出土遺物 P2・P3・P5・P6** から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

**P2出土土器** 土師器の杯と壺が出土している。杯は体部片が出土しており、外面に赤彩が認められる。壺も体部片が出土しており、内面がヘラ削り、外面がハケにより仕上げられている。

**P3出土土器** 土師器の杯Aの底部片が出土している。内外面に赤彩が認められる。

**P5出土土器** 土師器の壺の頭部片が出土している。長胴タイプに分類される壺で、内面は横ハケ、外面は縦ハケにより仕上げられている。

**P6出土土器** 土師器の杯Aの底部片が出土している。底部はヘラにより切り離されている。

時 期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ期～Ⅷ期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB65(図版11 附表12・37)

検出状況 建物群8の南東部、SB62の東側、SB64の南側に位置する(第155図)。他の建物との平面的重複、および切り合い関係は認められない。建物の南東隅は調査区外に拡がるため、建物全体の復元は困難である。南梁行の中間柱についても土壤に切られ未検出である。

建 物 南北方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の側柱建物である(第163図)。検出した範囲においては桁行、梁行ともに平行関係にあり、柱通りについても乱れは認められない。

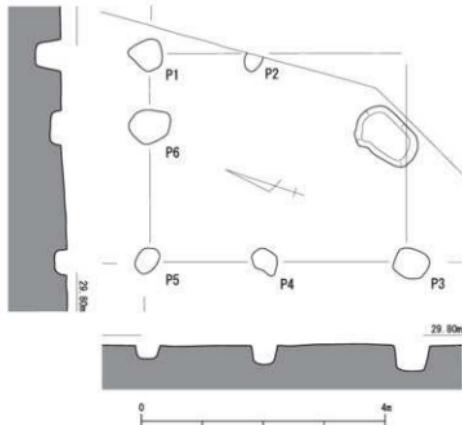
建物の規模は、西桁行(P3-P5)

で4.35m、北梁行(P1-P5)で3.40mを測り、両者を基準とした面積は14.79m<sup>2</sup>である。西桁行を基準とした棟軸方向はN18°00'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表12の通りである。

柱 穴 西桁行と北梁行の全ての柱穴と、東桁行の中間柱が検出されている。柱穴の規模は、50cmを超えるもの(P1・P3・P6)と、超えないもの(P2・P4・P5)とが認められる。後者の平面形は梢円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表12の通りである。

**出土遺物 P4とP3を除く各柱穴から土器が出土している(図版11)。**

**P1出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は杯と壺Ecが出土している。杯は体部片で、内面に赤彩が認められる。壺Ecは口縁部片で、丸胴タイプに復元することができる。



第163図 SB65

須恵器は杯Aと甕が出土している。杯Aは底部片で、糸切りにより切り離されている。甕は体部片で、外面は叩き整形により仕上げられ、内面には当て具痕が認められる。

**P2 出土土器** 土師器と製塙土器が出土している。

土師器は杯Aと甕が出土している。杯Aは底部から体部にかけての小片と、底部片が出土している。前者は内外面に、後者は外面に赤彩が認められる。この他、内外面に赤彩が認められる杯の口縁部片も出土している。甕は体部片が出土しており、内面がヘラ削り、外面がハケにより仕上げられている。製塙土器は体部の小片が出土している。

**P5 出土土器** 土師器の杯(295)と杯Aが出土している。295は内外面とも回転ナデにより仕上げられ、内面に赤彩が認められる。杯Aは底部から体部にかけて残存し、内外面とも赤彩が認められる。

**P6 出土土器** 須恵器の甕と製塙土器の体部片が出土している。

時 期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅳ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。



第164図 建物群9

## 10. 建物群9

北地区南東部に位置する。建物群7の東側、建物群12の北東側に位置する(第79図)。3棟の建物(SB66～SB68)からなる建物群である(第164図)。3棟の建物は、互いに重複関係にはない。また切り合い関係も認められない。

## SB66(図版11 附表13・37)

**検出状況** 建物群9の北東部に位置する(第164図)。建物の東部は調査区外に拡がるため、建物全体の復元は困難である。また北東梁行の中間柱についても、一部は調査区外へ拡がっている。他の建物等との切り合い関係は認められない。

**建 物** 北東～南西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の側柱建物である(第165図)。検出した範囲においては、桁行・梁行ともに平行関係にあり、柱通りについても乱れは認められない。

建物の規模は、北西桁行(P4～P6)で4.55m、南西梁行(P2～P4)で

3.30mを測り、両者を基準とした面積は15.01m<sup>2</sup>である。北西桁行を基準とした棟軸方向はN54° 00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表13の通りである。

**柱 穴** 東隅の1穴を除く柱穴が検出されている。柱穴の規模は40cm～50cm大とほぼ同規模である。検出面からの深さが30cmを超えるもの(P1・P3・P4)も認められ、全体的に深い傾向が認められる。

埋土はいずれも黒褐色シルト質細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表13の通りである。

**出土遺物** P5とP7を除く各柱穴から土器が出土している(図版11)。

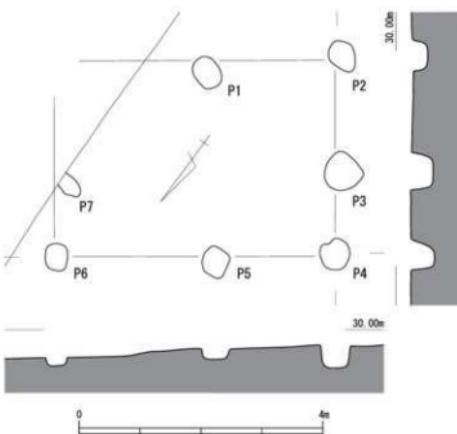
**P1出土土器** 土師器の杯と鍋が出土している。杯は体部の小片で、内外面に赤彩が認められる。鍋は口縁部片が出土しており、内面が斜方向のハケ、外面が横ナデにより仕上げられている。外面には煤の付着が認められる。

**P2出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は壺の体部片が出土している。内面がヘラ削り、外面がハケにより仕上げられている。須恵器は杯もしくは杯蓋の体部片が出土している。外面は回転ヘラ削りが施されている。

**P3出土土器** 土師器の杯と壺の体部片が出土している。壺は、内面がヘラ削り、外面がハケにより仕上げられている。

**P4出土土器** 土師器の杯A(296)・杯・壺が出土している。

296は皿Ad3に分類され、底部から口縁部にかけて残存する。底部外面はナデと指オサエにより、他の



第165図 SB66

外面は横ナデにより仕上げられている。内面については摩滅のため調整は観察できない。杯については体部片が出土しており、内外面に赤彩が認められる。甕は体部片が出土しており、内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。

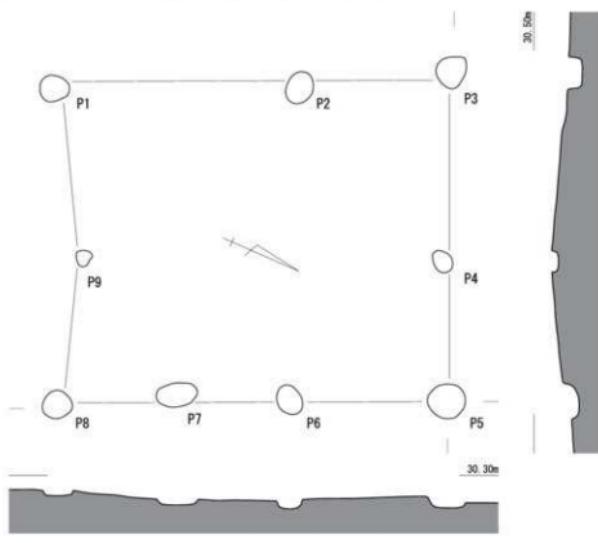
P6出土土器 土師器の甕Ebが出土している。口縁部を中心に残存し、外面には煤の付着が認められる。  
時 一期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構IX期に位置付けられる(第7章第1節)。

## SB67(附表13)

検出状況 第4次調査と第6次調査で明らかとなった掘立柱建物跡である。両調査の平面図を合成後、復元することができた建物である。建物群9の南西部、SB68の北西側に位置する(第164図)。他の建物との切り合い関係は認められない。

建 物 南北方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間の側柱建物である(第166図)。ただし南北桁行については1穴を欠く。桁行は平行関係にあるが、梁行に関しては南東梁行の柱通りがやや乱れている。北西梁行(P3-P5)で5.35m、北東桁行(P5-P8)で6.40mを測り、両者を基準とした平面積は34.24m<sup>2</sup>である。北東桁行を基準とした棟軸方向はN24° 00' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表13の通りである。

柱 穴 南西桁行の1穴(P1-P2間)を除いて全ての柱穴が検出されている。いずれの柱穴も平面形が正んだ形状をなしている。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂・細砂1層からなる。柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表13の通りである。



第166図 SB67

出土遺物 P3とP5から土器が出土している。いずれも小片のため固化できなかった。

P3出土土器 土師器と須恵器が出土している。

土師器は壺の体部片が出土している。内面がヘラ削り、外面がハケにより仕上げられ、外面には煤の付着が認められる。須恵器は天井部から口縁部にかけて残存する杯蓋が出土している。外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。

P5出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は壺の体部片が出土している。内面がヘラ削り、外面がハケにより仕上げられている。須恵器は底部から体部にかけて残存する壺が出土している。

時 期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構VI期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB68(附表13)

検出状況 建物群9の南端部、SB67の南東側に位置する(第164図)。想定される建物の約1/2が調査区外に拡がっている。このため、建物の全容は不明である。他の遺構との切り合い関係は認められない。

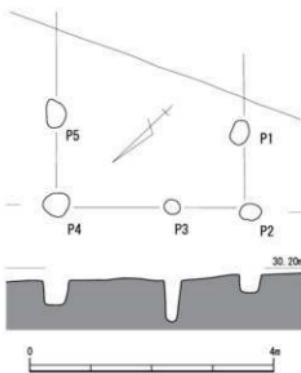
建 物 北西-南東方向に棟軸をもつ梁行2間の側柱建物である(第167図)。桁行については、建物が調査区外へ拡がるため、その規模は不明である。少なくとも2間はあったことは明らかである。

建物の規模は、北西梁行(P2-P4)で3.20mを測り、北東桁行を基準とした棟軸方向はN46°00'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表13の通りである。

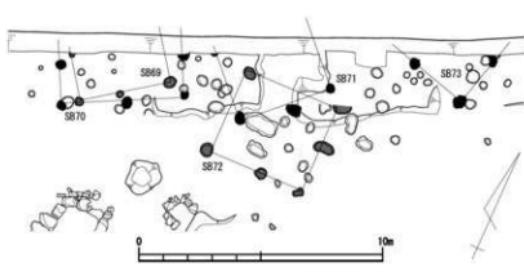
柱 穴 調査区内では全ての柱穴が検出されている。柱穴の平面形は全体的に楕円形傾向にあり、他の建物の柱穴と比較して深い傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表13の通りである。

出土遺物 P2から土師器の壺が出土している。口縁部の小片である。

時 期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。



第167図 SB68



第168図 建物群10

## 11. 建物群10

南地区の北西部に位置する建物群である(第79図)。建物群3の南側、建物群11の西側、建物群13の北側にあたる。5棟の建物(SB69～SB73)からなる(第168図)。SB72を除く4棟の建物についてはいずれも北側の市道まで拡がっており、全体を検出することはできなかった。

## SB69(附表13)

**検出状況** 建物群10の西部に位置する(第168図)。SB70と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。また他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。建物の大半は北側調査区外へ拡がっており、全体の約1/2弱が検出されているものと考えられる。

**建 物** 北東～南西方向に棟軸をもつ桁行2間の側柱建物である(第169図)。梁行については1間分検出されているが、他の建物の規模から判断して2間はあったものと考えられる。梁行と桁行は直角関係にあり、柱通りも良好である。建物の規模は、南東梁行(P1～P3)で3.85mを測り、これを基準とした棟軸方向はN55°00'

Eを示している。各柱穴間の距離等は附表13の通りである。

**柱 穴** 検出されるべき柱穴は全て検出されている。柱穴の平面形は円形もしくは椭円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表13の通りである。

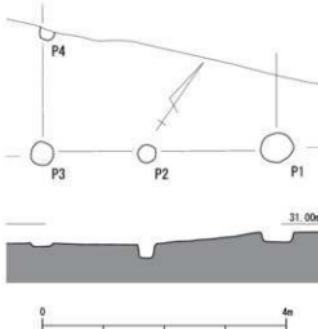
**出土遺物** 遺物は全く出土していない。

**時 期** 出土遺物から時期を判断することは困難である。建物の方位等から判断して、南構Ⅶ～Ⅸ期に位置付けられる(第7章第1節)。

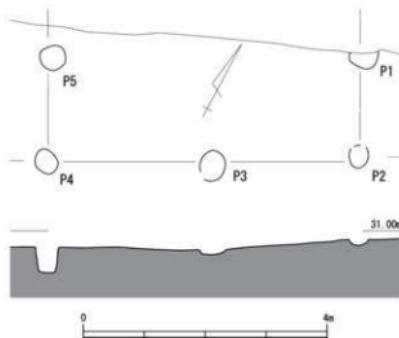
## SB70(附表13)

**検出状況** 建物群10内西部に位置する(第168図)。SB69と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。建物の大半は調査区の北側へ拡がっており、全体の約1/2が検出されているものと考えられる。

**建 物** 北東～南西方向に棟軸をもつ桁行2間の側柱建物である(第170図)。梁行については1間分検出されているが、他の建物の規模から判断して2間はあったものと考えられる。梁行と桁行は直角関係にあり、柱



第169図 SB69



第170図 SB70

通りも良好である。南東桁行(P2-P4)で5.10mを測り、これを基準とした棟軸方向はN62° 00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表13の通りである。

**柱 穴** 検出されるべき柱穴は全て検出されている。柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形傾向にある。検出面からの深さは全体的に浅い傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂-細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表13の通りである。

**出土遺物** 遺物は全く出土していない。

**時 期** 出土遺物から時期を判断することは困難である。棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB71(附表13)

**検出状況** 建物群10の中央部に位置する(第168図)。

SB72と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。他の遺構との切り合い関係も認められない。検出した建物の大半は後世の擾乱を受けている。また建物の北側は調査区外まで拡がっており、検出できたのは全体の約1/2弱と考えられる。

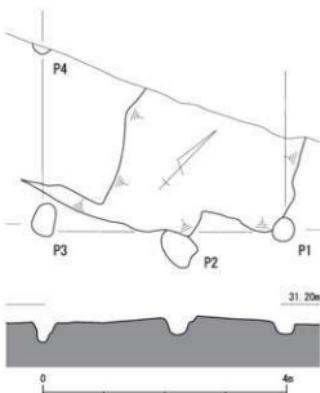
**建 物** 北西-南東方向に棟軸をもつ梁行2間の側柱建物である(第171図)。桁行については1間分検出されているが、他の建物の規模から判断して2間はあったものと考えられる。梁行と桁行は直交関係にあるが、梁行の柱通りには乱れが認められる。南東梁行(P1-P3)で3.95m、南西桁行(P3-P4)で2.90mを測り、南西桁行を基準とした棟軸方向はN43° 30' Wを示している。

各柱穴間の距離等は附表13の通りである。

**柱 穴** 3穴検出されている。柱穴の平面形は、隅丸方形もしくは梢円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂-細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表13の通りである。

**出土遺物** 遺物は全く出土していない。

**時 期** 棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。



第171図 SB71

#### SB72(附表13)

**検出状況** 建物群10の中央部に位置する(第168図)。SB71と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。他の遺構との切り合い関係も認められない。建物北西部を中心に後世の擾乱を受けているが、建物全体が検出されている。

**建 物** 東西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の側柱建物である(第172図)。桁行の規模が異なるため平面形はやや台形傾向にある。ただし柱通りは良好である。建物の規模は、南桁行(P4-P6)で4.20m、東梁行(P2-P4)で3.90mを測り、両者を基準とした面積は16.38m<sup>2</sup>である。南桁行(P4-P6)を基準とした棟軸方向はN88° 30' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表13の通りである。

**柱 穴** 後世の攪乱により北桁行と西梁行の中間柱を欠く。柱穴の平面形は、隅丸方形もしくは楕円形傾向にあり、全体的に同規模である。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表13の通りである。

**出土遺物** P2とP5から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

**P2出土土器** 土師器と須恵器が出士している。

土師器は、杯の口縁部片と甕の体部片が出土している。甕は丸胴タイプに分類されるもので、内面がナデ、外

がハケにより仕上げられ、外面には煤の付着が認められる。須恵器は杯と甕が出土している。杯は体部から口縁部にかけて残存している。甕は体部片が出土しており、外面は叩き整形後カキ目が施されている。

**P5出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は杯と鍋が出土している。杯は体部から口縁部にかけて残存し、内外面に赤彩が認められる。鍋は口縁部片が出土している。

須恵器は椀と甕が出土している。椀は体部から口縁部にかけて残存する。甕は体部片が出土し、外面は叩き整形により仕上げられている。

**時 期** 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB73(附表14)

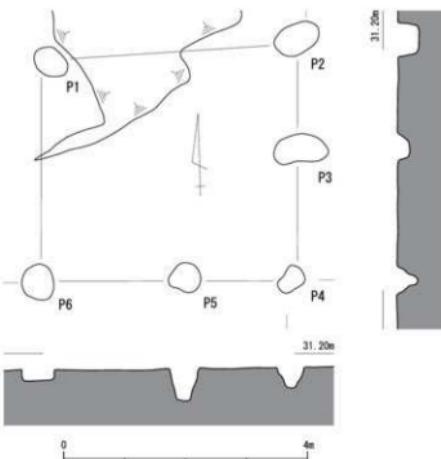
**検出状況** 建物群10の東側に位置する(第168図)。建物の大半は調査区の北側外へ拡がっており、全体の約1/4が検出されているものと考えられる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

**建 物** 南北方向に棟軸をもつ建物である(第173図)。梁行・桁行とも1間分検出されているが、梁行と桁行の判別は困難である。柱穴間の規模は、P1-P2間で1.75m、P2-P3間で1.90mを測る。P1-P2を基準とした棟軸方向はN16°15'Eを示している。各柱穴間の距離等は附表14の通りである。

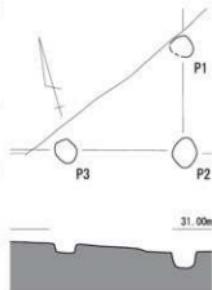
**柱 穴** 3穴検出されている。柱穴の平面形は楕円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。

**出土遺物** 遺物は全く出土していない。

**時 期** 棟軸方向から判断して南構VII期～Ⅷ期に位置付けられる(第7章第1節)。



第172図 SB72



第173図 SB73

## 12. 建物群11

南地区北端部中央に位置する(第79図)。建物群3の南側、建物群10の東側、建物群12の西側にあたる。3棟の建物(SB74～SB76)からなる(第174図)。



第174図 建物群11

## SB74(附表14)

**検出状況** 建物群11の北部に位置する(第174図)。SB75と平面的に重複し、P4がSB75のP5に切られている。建物の北西側は調査区外へ拡がり、北側は後世の擾乱を受けている。このため、北東桁行の中間柱は1穴も検出されていない。

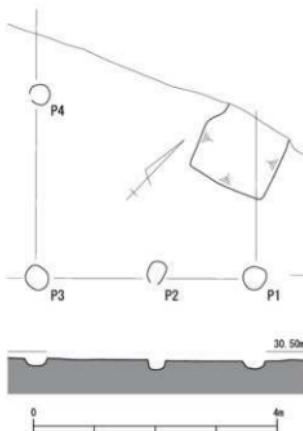
**建 物** 北西～南東方向に棟軸をもつ梁行2間の側柱建物である(第175図)。桁行については1間分検出されているが、他の建物の規模から判断して、2間もしくは3間あったものと考えられる。検出した範囲では両桁行が平行関係にあり、かつ梁行とは直交関係にあり、整った平面形をなしている。

建物の規模は、南東梁行(P1～P3)で3.60m、南西桁行(P3～P4)で3.00mを測り、南西桁行を基準とした棟軸方向はN44° 00' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表14の通りである。

**柱 穴** 南東梁行から北西桁行にかけての柱穴が検出されている。いずれの柱穴も比較的小型で同規模である。平面形は楕円形もしくは円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表14の通りである。

**出土遺物** 遺物が全く出土していない。

**時 期** 出土遺物から時期を特定することは困難である。SB75との切り合い関係および建物の棟軸方向から判断して、南構Ⅶ～Ⅸ期に位置付けられる(第7章第1節)。



第175図 SB74

## SB75(附表14)

**検出状況** 建物群IIの北側に位置する(第174図)。SB74と平面的に重複し、P5がSB74のP4を切っている。建物の北側は調査区外へ拡がっている。またP1の北側は後世の擾乱を受けている。

**建 物** 北西 - 南東方向に棟軸をもつ梁行2間の側柱建物である(第176図)。桁行については1間分検出されているが、他の建物の規模から判断して、2間もしくは3間はあったものと考えられる。検出した範囲では、両桁行が平行関係にありかつ梁行とは直交関係にあり、整った平面形をなしている。南東梁行(P2-P4)の規模は4.25mである。北東桁行(P1-P2)を基準とした棟軸方向はN23° 00' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表14の通りである。

**柱 穴** 検出した範囲では全ての柱穴が検出されている。P3を除いては比較的小型の柱穴により構成されている。平面形は梢円形もしくは円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表14の通りである。

**出土遺物** P3から土師器と須恵器の杯が出土している。土師器は底部片が出土しており、回転糸切りにより切り離されている。須恵器は体部片が出土している。

**時 期** SB74との切り合い関係および出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅱ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

## SB76(附表14)

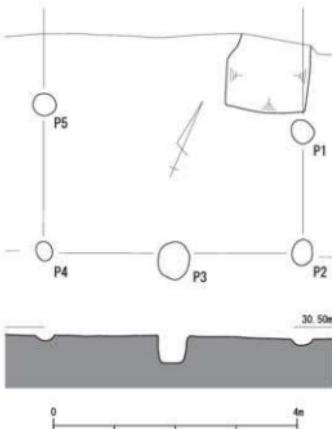
**検出状況** 建物群IIの南側に位置し(第174図)、SB74・SB75の南側に位置する。他の建物との平面的な重複は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** 北東 - 南西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行4間の側柱建物である(第177図)。建物全体は検出されているが、北西桁行の2穴を欠く。北東梁行の柱通りがわずかに乱れているが、桁行・梁行とともに平行関係にあり同規模である。このためほぼ平面的に整った長方形をなしている。ただし南東桁行の柱穴間距離は一定していない。

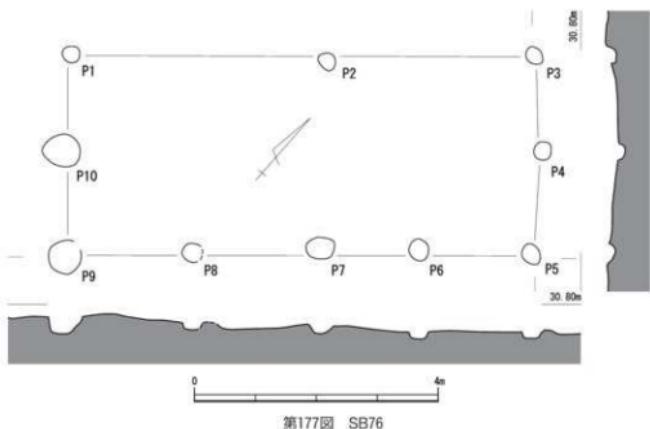
建物の規模は、南西梁行(P1-P9)で3.30m、南東桁行(P5-P9)で7.65mを測り、两者を基準とした平面積は25.24m<sup>2</sup>である。南東桁行を基準とした棟軸方向はN49° 30' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表14の通りである。

**柱 穴** P9とP10を除いては20cm～30cm大小の規模な柱穴からなる。いずれの柱穴の平面形も整った形状をなさないが、梢円形もしくは円形の傾向が認められる。深さもP9が26cmと最深で、他は16cm以下と全体的に浅い傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表14の通りである。

**出土遺物** 遺物は全く出土していない。



第176図 SB75



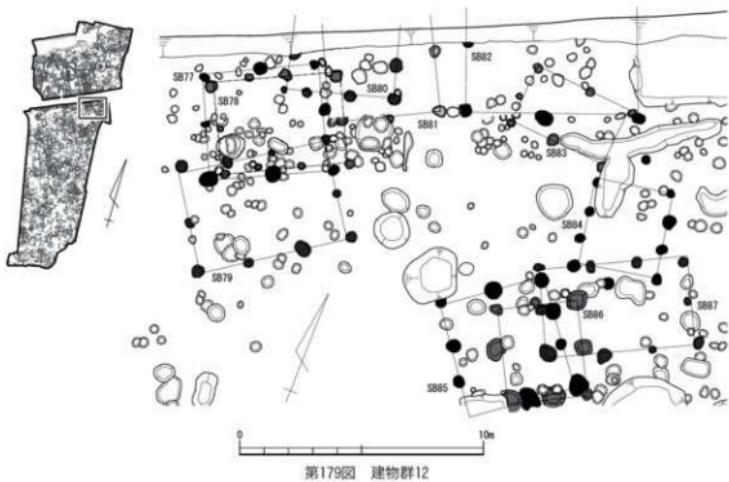
時 期 棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

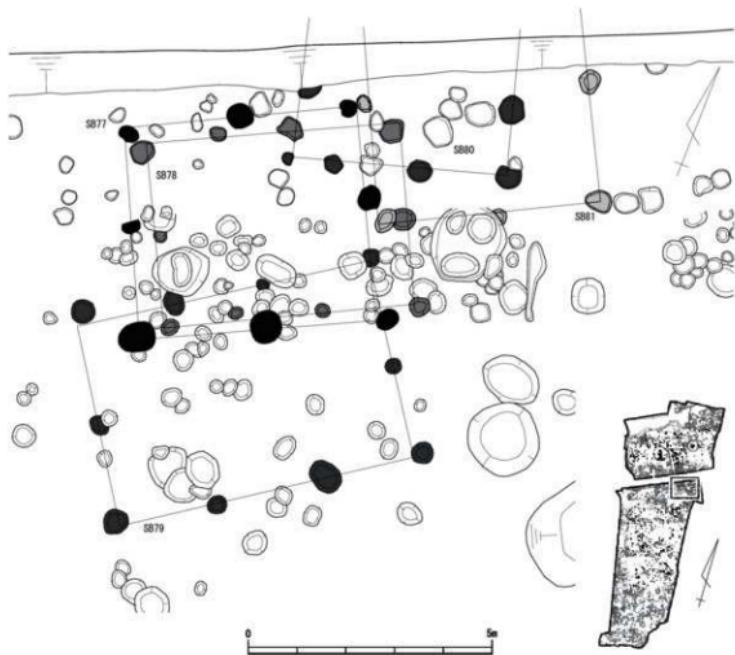
### 13. 建物群12

南地区北東部に位置する。建物群7の南側、建物群11の東側、建物群14の北東側、建物群15の北側にあたる(第79図)。11棟の建物(SB77~SB87)からなり、北西部(第180図)と南東部(第186図)で建物相互の平面的重複が顕著である(第178図・第179図)。



第178図 建物群12の調査





第180図 建物群12(SB77～SB81)

## SB77(図版12 附表14・37)

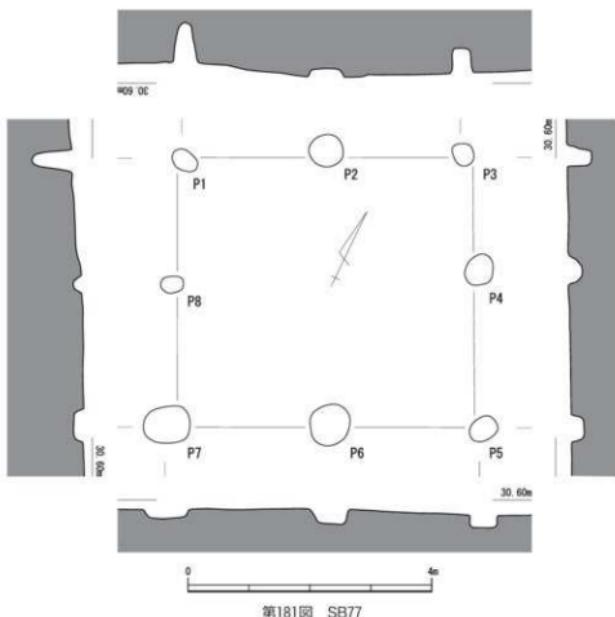
**検出状況** 建物群12の北西部に位置する(第179図)。SB78と平面的には重複するが(第180図)、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。またSB79・SB80とも一部平面的に重複するが(第180図)、前後関係を明らかにすることはできなかった。さらにSB81の南西側で棟軸方向をほぼ同じくして隣接している。他の遺構との明確な切り合い関係も認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** 北東～南西方向に棟軸をもつ渠行2間、桁行2間からなる側柱建物である(第181図)。渠行とも平行関係にあり、整った平面形をなしている。柱通りについてもほぼ良好である。建物の規模は、南東桁行(P5-P7)で5.25m、北東梁行(P3-P5)で4.50mを測り、両者を基準とした建物の面積は23.62m<sup>2</sup>である。南東桁行(P5-P7)を基準とした棟軸方向はN65°00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表14の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。柱穴の平面形は楕円形もしくは隅丸方形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表14の通りである。

**出土遺物** P4とP5から土器が出土している(図版12)。

**P4出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は杯Aと甕が出土している。杯Aは底部片が



第181図 SB77

出土している。壺は口縁部片(297)と体部片が出土している。297は口縁部のみ残存する個体で、緩やかに外反し、端部は丸くおさめられている。外面が縦方向、内面が横方向のハケの後、端部が内外面に対するやや強い横ナデにより仕上げられている。体部片については丸胴タイプに分類されるものである。内面がヘラ削り、外面がハケにより仕上げられ、外面には煤の付着が認められる。

須恵器は杯Aの底部片が出土しており、ヘラにより切り離されている。

P5出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は杯と壺が出土している。杯は体部の小片であるが、精良な胎土で外面には赤彩が認められる。壺は体部の小片で、内面はヘラ削りにより仕上げられ、外面には多量の煤の付着が認められる。

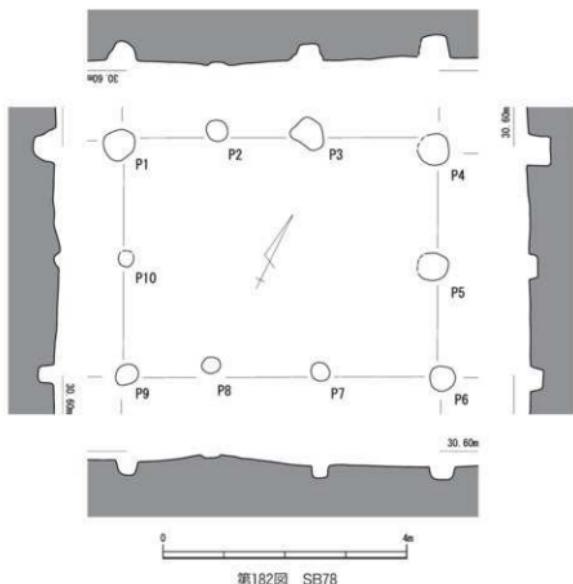
須恵器は碗(298)が出土している。298は口縁部の小片で、杯の可能性も考えられる。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、内外面に重ね焼き痕も認められる。

時 一期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅱ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB78(附表14)

検出状況 建物群12北西部に位置する(第179図)。SB77・SB79・SB80と平面的には重複するが(第180図)、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。SB81とも平面的に一部重複し、P5がSB81のP4に切られている。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

建 物 北東-南西方向に棟軸をもつ、梁行2間、桁行3間からなる側柱建物である(第182図)。梁



第182図 SB78

行・桁行とも平行関係にありかつ同規模で、整った平面形をなしている。ただし、柱通りについてはやや乱れが認められる。建物の規模は、南東桁行(P6-P9)で5.20m、北東梁行(P4-P6)で3.80mを測り、両者を基準とした建物の面積は19.76m<sup>2</sup>である。南東桁行(P6-P9)を基準とした棟軸方向はN 63° 45' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表14の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。P3を除く柱穴の平面形は、梢円形もしくは円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表14の通りである。

**出土遺物** P4とP5から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

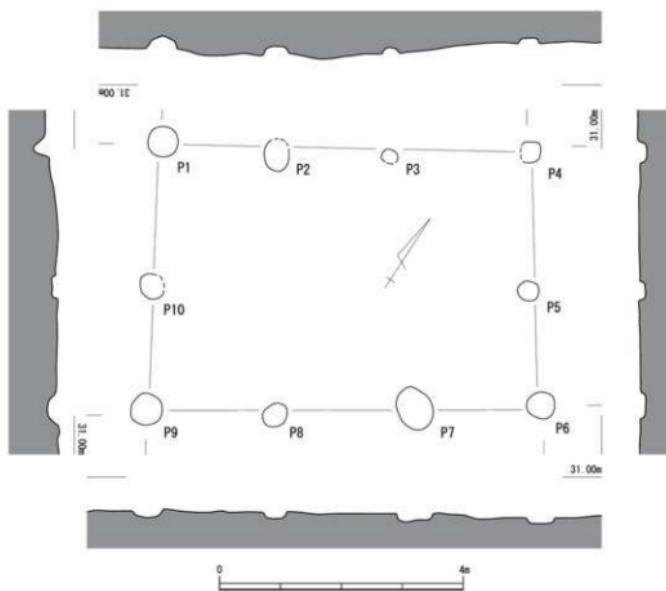
**P4出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は杯と高杯が出土している。杯は口縁部の小片で、薄手に仕上げられ赤色化している。高杯は脚端部片で赤色化している。須恵器は杯Aの底部片が出土している。底部はヘラにより切り離されている。

**P5出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は杯と甕が出土している。杯は体部の小片であるが、精良な胎土で外面に赤彩が認められる。甕は体部の小片で、内面はヘラ削りにより仕上げられ、外面には煤が多量に付着している。須恵器は杯の口縁部片が出土している。

**時 期** SB81との切り合い関係および出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB79(附表15)

**検出状況** 建物群12の西部にあたる(第179図)。建物の北側がSB77・SB78と平面的に重複するが(第



第183図 SB79

180図)、調査では前後関係は明らかにできなかった。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** 南西 - 北東方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間の個柱建物である(第183図)。桁行・梁行ともほぼ平行関係にあり、整った平面形をなしている。建物の規模は、北西桁行(P1-P4)で6.00m、北東梁行(P4-P6)で4.15mを測り、両者を基準とした建物の面積は24.90m<sup>2</sup>である。南東桁行を基準とした棟軸方向はN52°30'Eを示している。各柱穴間の距離等は附表15の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。柱穴の平面形は隅丸方形もしくは円形をなし、全体的に整った形状をなしている。検出面からの深さは、全体的に10cm大と浅い傾向にある。このなかでP1が20cmと最も深くなっている。柱穴の規模は、P3が20cm大と他より小さく、他はほぼ同規模である。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂1層からなる。柱痕を確認することができた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表15の通りである。

**出土遺物** P4から土師器の小片がわずかに出土している。器種の特定も困難である。

**時 期** 出出土器から時期を特定することは困難である。棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB80(附表15)

**検出状況** 建物群12の北端部西側に位置する(第179図)。SB77・SB78・SB81と平面的に重複する(第180図)。調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。他の遺構との明確な切り合い関係も認

められない。建物の北側は調査区外に拡がっており、検出できたのは全体の1/2強と考えられる。

**建 物** 東西方向に棟軸をもつ桁行3間からなる隅柱建物である(第184図)。梁行については1間分検出されているが、他の建物の規模から判断して2間はあったものと考えられる。検出した範囲では、柱通りは比較的良好である。南桁行(P2-P5)で4.60mを測り、これを基準とした棟軸方向はN $78^{\circ} 00' E$ を示している。各柱穴間の距離等は附表15の通りである。

**柱 穴** 建物を検出した範囲では、全ての柱穴が全て検出されている。P5を除いては、ほぼ同規模

の柱穴から構成されている。柱穴の平面形は隅丸方形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表15の通りである。

出土遺物 P2とP4から土器が出土している。いずれも小片のため固化できなかった。

**P2出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は甕の体部片が出土している。内面がヘラ削り、外面がハケにより仕上げられている。

須恵器は甕の体部片が出土している。外面は叩き整形により、内面はナデにより仕上げられている。

**P4出土土器** 土師器の甕の体部片が出土している。内外面ともナデにより仕上げられている。

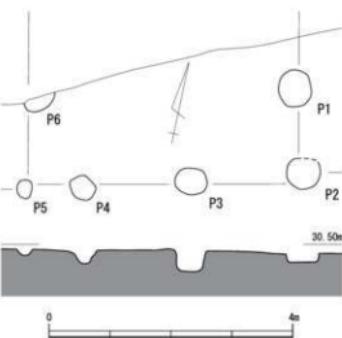
**時 期** 出土遺物から時期を特定することは困難である。棟軸方向から判断して、南構Ⅱ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB81(附表15)

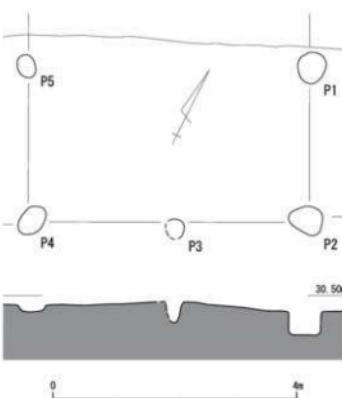
**検出状況** 建物群12北端部中央に位置する(第179図)。SB78・SB80と平面的に重複し(第180図)、P4がSB78のP5を切っている。SB80との前後関係については、調査では明らかにすることはできなかった。建物の北側は調査区外に拡がっており、検出できたのは全体の約1/2と考えられる。

**建 物** 北西～南東方向に棟軸をもつ、梁行2間からなる隅柱建物である(第185図)。梁行については1間分検出されているが、他の建物の規模から判断して2間もしくは3間あったものと考えられる。

検出した範囲では、柱通りは良好である。また両桁行は平行し、梁行と直交し、整った平面形をなしている。南東梁行(P2-P4)の規模は4.55mである。北東桁行(P1-P2)を基準とした棟軸方向はN $25^{\circ} 45' W$ を示している。各柱穴間の距離等は附表15の通りである。



第184図 SB80



第185図 SB81

**柱 穴** 建物を検出した範囲では、全ての柱穴が全て検出されている。柱穴の平面形は、梢円形もしくは隅丸方形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表15の通りである。

**出土遺物 P2・P4・P5** から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

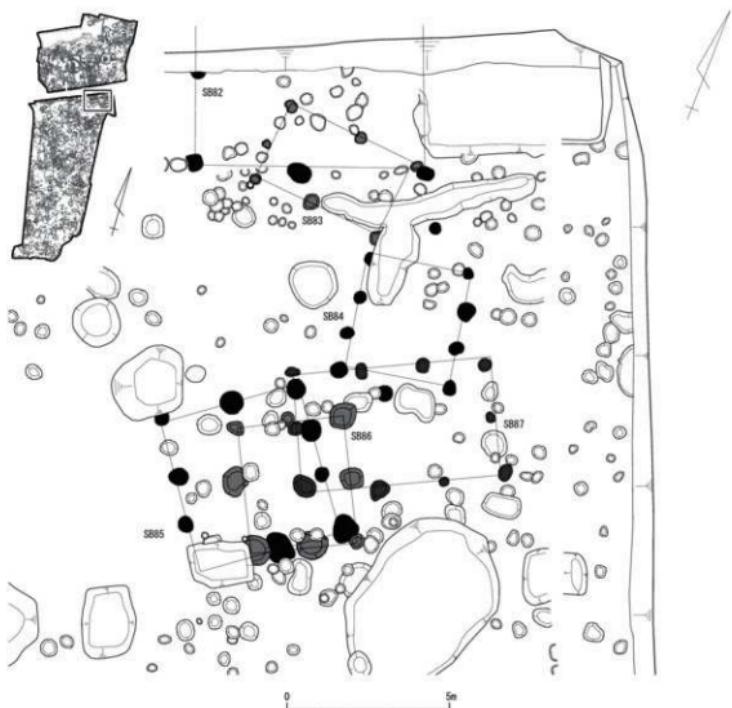
**P2出土土器** 土師器の壺の体部片が出土している。内面がヘラ削り、外面がハケにより仕上げられている。

**P4出土土器** 土師器の壺Gaが出土している。

**P5出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は壺の体部片が出土している。内面がヘラ削り、外面はハケにより仕上げられ、外面には煤の付着が認められる。

須恵器は壺の体部片が出土している。外面は叩き整形後カキ目が施され、内面には当て具痕が認められる。

**時 期** SB78との切り合い関係および出土遺物・棟軸方向から判断して、南構造-2期に位置付けられる(第7章第1節)。



第186図 建物群12(SB82～SB87)

## SB82(附表15)

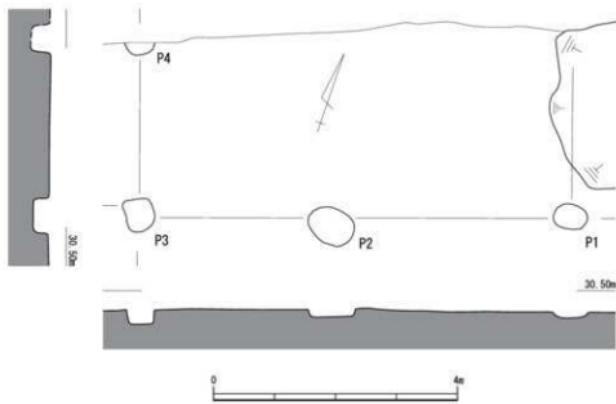
**検出状況** 建物群12内北東部、SB81の東側に位置する(第179図)。SB83と平面的に重複し(第186図)、P1がSB83のP3を切っている。建物の北側は調査区外に抜がっており、検出できたのは全体の約1/2と考えられる。建物東部は後世の搅乱を受け、東梁行の中間柱を検出することはできなかった。

**建 物** 東西方向に棟軸をもつ、桁行2間からなる側柱建物である(第187図)。梁行については1間分検出されているが、他の建物の規模から判断して2間と考えられる。検出した範囲では柱通りは良好である。桁行と梁行が直交し、整った平面形をなしている。南桁行(P1-P3)は7.10mを測り、これを基準とした棟軸方向はN71° 00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表15の通りである。

**柱 穴** 4穴検出したが、当初は後世の搅乱を受けた箇所に東梁行の中間柱があったものと考えられる。柱穴の規模は全体的に大型で、平面形は隅丸方形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表15の通りである。

**出土遺物** P2から土師器の鍋の口縁部片が出土している。小片のため図化はできなかった。

**時 期** SB83との切り合い関係および出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅱ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。



第187図 SB82

## SB83(附表15)

**検出状況** 建物群12内北東部に位置する(第179図)。建物群12内においては、棟軸方向を他の建物と大きく異にしている。SB82と平面的に重複し(第186図)、P3がSB82のP1に切られている。建物全体が検出されているが、南東部は後世の搅乱を受け、東梁行の中間柱と南東隅柱を検出することはできなかった。

**建 物** 東西方向に棟軸をもつ桁行2間、梁行2間からなる側柱建物である(第188図)。梁行・桁行ともに平行関係にあり、整った平面形をなしている。柱通りも良好である。北桁行(P1-P3)で4.25m、西梁行(P1-P6)で2.60mを測り、两者を基準とした面積は11.05m<sup>2</sup>である。また北桁行を基準とした棟軸方向はN84° 45' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表15の通りである。

**柱 穴** 東梁行の中間柱を除く全ての柱穴が検出されている。柱穴の規模は全体的に50cm以下と小型で、平面形は円形もしくは隅丸方形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。

各柱穴の規模は附表15の通りである。

**出土遺物** P2から土師器と須恵器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。土師器は杯の底部片が出土している。須恵器は甕の体部片が出土しており、外面が叩き整形後カキ目が施され、内面には當て具痕が認められる。

**時 期** SB82との切り合い関係および

出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-1期に位置付けられる(第7章第1節)。

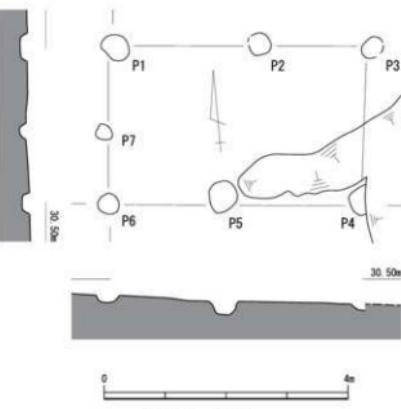
#### SB84(附表15)

**検出状況** 建物群12の東部中央に位置する(第179図)。SB83の南東側に位置する(第186図)。SB87とは一部平面的に重複しているが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

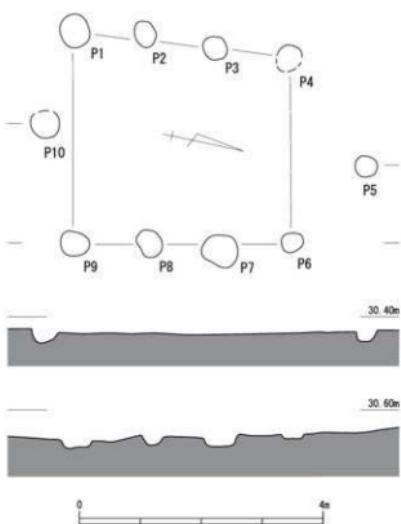
**建 物** 南北方向に棟軸をもつ梁行1間、桁行3間の側柱建物で、両側梁行に棟持柱を有する(第189図)。南北の梁行は平行関係にあるが桁行は平行関係ではなく、平面的には台形状をなしている。P5とP10が各梁行の柱通りから明らかに離れていることから、棟持柱と判断したものである。P5-P10間の距離は5.30mを測る。また西桁行・東桁行とも南側3間分の柱穴間規模はほぼ同じであるが、北側1間分は明らかに狭い傾向にある。

北梁行(P4-P6)で3.05m、東梁行(P6-P9)で3.60mを測り、两者を基準とした平面積は10.98m<sup>2</sup>である。東梁行を基準とした棟軸方向はN12°00'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表15の通りである。

**柱 穴** P4の一部が後世の擾乱を受けているが、全ての柱穴が検出されている。いずれの柱穴の平面形も整った形状をなさない



第188図 SB83



第189図 SB84

が、P1とP3については隅丸方形の傾向が認められる。P7がやや大型である以外は30cm～40cm大と、その規模は全体的に小型である。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表15の通りである。

出土遺物 全く出土していない。

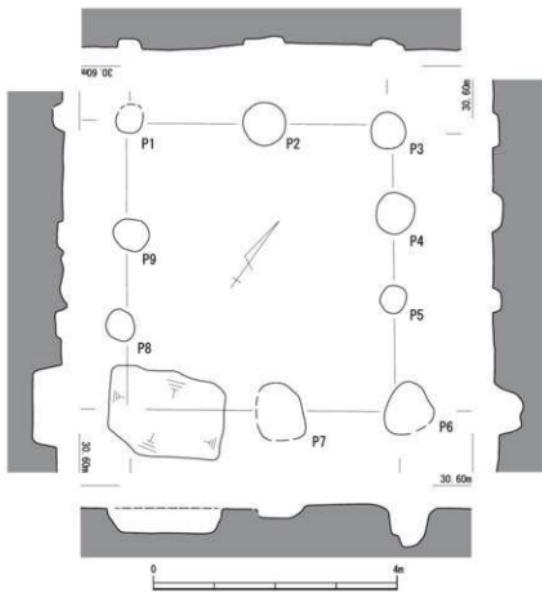
時 期 遺物が全く出土していないため、遺物から時期と特定することは困難である。SB87との平面的重複関係および棟軸方向から判断して、南構Ⅷ-1期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB85(附表16)

検出状況 建物群12の南部中央に位置する(第179図)。SB86とは平面的に1/2以上が重複し(第186図)、本建物のP6とP7がSB86のP5とP7に切られている。SB87のP10とも切り合い関係にあり、本建物のP4がP10を切っている。南西隅の1穴を後世の擾乱により欠く以外、建物のほぼ全体が検出されている。

建 物 北西～南東方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間の個柱建物である(第190図)。梁行はほぼ平行関係にあるが、西桁行はやや柱通りが乱れている。このため全体的にやや歪んだ平面形となっている。建物の規模は、北東桁行(P3～P6)で4.65m、北西梁行(P1～P3)で4.30mを測り、両者を基準とした建物の面積は19.99m<sup>2</sup>である。北東桁行を基準とした棟軸方向はN36°15'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表16の通りである。

柱 穴 南隅を除く全ての柱穴が検出されている。柱穴の規模はP2とP6が70cm大～90cm大と大型



第190図 SB85

であるのに対して、他の柱穴は60cm以下である。柱穴の平面形は、明らかに方形傾向にあるものは認められない。検出面からの深さは全体的に20cm以下であるが、P6が48cmと極端に深くなっている。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂1層からなる。柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表16の通りである。

**出土遺物 P2とP5から土器が出土している。いずれも小片のため固化できなかった。**

**P2出土土器** 土師器の壺と甕が出土している。壺は体部片が出土しており、内面がヘラ削り、外面がハケにより仕上げられている。甕は底部付近が出土しており、外面がハケ、内面が指サエにより仕上げられている。

**P5出土土器** 土師器の壺の体部片が出土している。丸胴タイプに分類されるもので、内外面ともハケにより仕上げられている。

**時 期** SB86・SB87との切り合い関係および出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

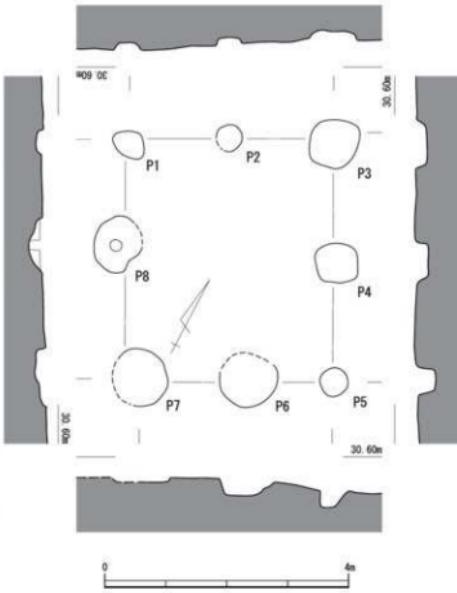
#### SB86(図版12 写真図版74 附表16・37)

**検出状況** 建物群12中央部南側に位置する(第179図)。SB87とは北東側の一部が平面的に重複し(第186図)、P2がSB87のP10を切っている。またSB85とも平面的に1/2以上が重複し、当建物のP5とP7がSB85のP6とP7を切っている。南西隅の柱穴が後世の擾乱を受けているものの、建物全体が検出されている。

**建 物** 北西-南東方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の側柱建物である(第191図)。桁行・梁行がほぼ平行関係にあり、全体的に整った方形をなしている。

建物の規模は、北東桁行(P3-P5)で3.95m、北西梁行(P1-P3)で3.50mを測り、両者を基準とした建物の面積は13.82m<sup>2</sup>である。北東桁行を基準とした棟軸方向はN 27° 15' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表16の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。柱穴の規模はP1・P2・P5が小型であるのに対して、他の柱穴は60cm大から90cm大と大型である。また、大型の柱穴の平面形は方形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂1層からなる。柱痕を確認できたのはP8に限られる。



第191図 SB86

各柱穴の規模は附表16の通りである。

**出土遺物 P3・P6・P7** から土器が出土している(図版12)。

**P3出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は壺の体部片が出土している。内外面ともハケにより仕上げられている。須恵器は杯蓋の天井部片が出土している。外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。

須恵器は壺H(299)が出土している。口縁部は直線的に斜上方にのび、端部は下方へつまみ出すようなナデにより仕上げられ、斜行する端面をなす。体部外面は叩き整形により仕上げられ、内面には当て具痕が残存する。口頭部は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

**P6出土土器** 土師器の杯Aの底部片が出土している。

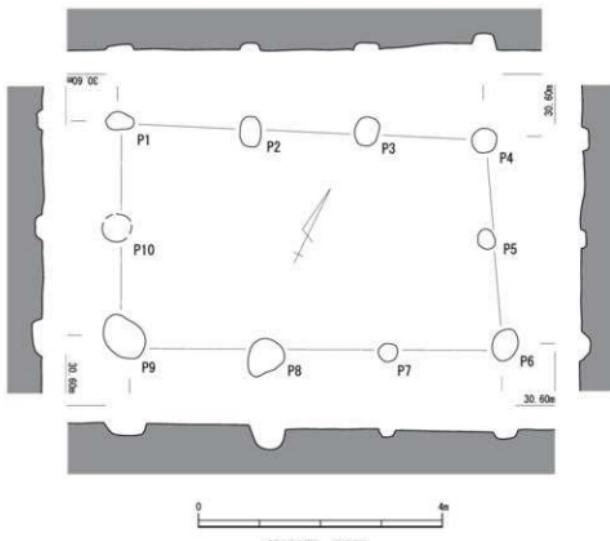
**P7出土土器** 土師器の椀と甌が出土している。椀は底部片が出土しており、糸切りにより切り離されるとともに、内面に赤彩が認められる。甌は底部の一部が出土している。

時 期 SB85・SB87との切り合い関係およびP7出土土師器椀・楕軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB87(図版12 写真図版74 附表16・37)

検出状況 建物群12の南東部に位置する(第179図)。SB84～SB86と平面的に重複し、SB85・SB86と切り合い関係にある(第186図)。本建物のP10が、SB85のP4およびSB86のP2にそれぞれ切られている。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

建 物 東西方向に楕軸をもつ梁行2間、桁行3間の側柱建物である(第192図)。南北の桁行は平行関係ではなく、全体的にやや歪んだ平面形をなしている。建物の規模は、南桁行(P6～P9)で6.25m、



第192図 SB87

西梁行(P1-P9)で3.55mを測り、両者を基準とした建物の面積は22.18m<sup>2</sup>である。南桁行を基準とした棟軸方向はN64°30' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表16の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。柱穴の平面形は、P1とP8を除いて隅丸方形もしくは円形をなし、全体的に整った形状をなしている。検出面からの深さは全体的に10cm大が一般的であるが、P8は41cmと突出している。柱穴の規模は、P8とP9がやや大型である以外、ほぼ同規模である。

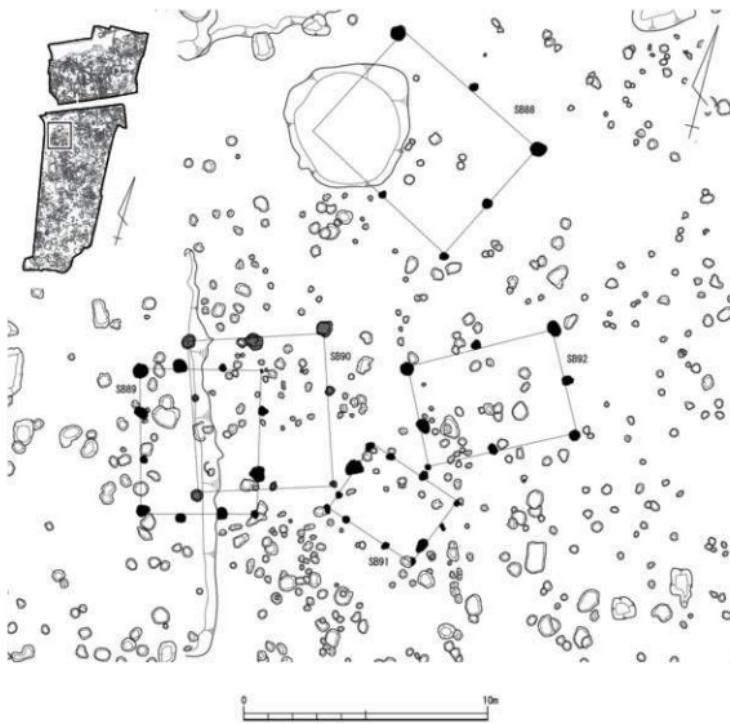
埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表16の通りである。

**出土遺物** P8とP9から土器が出土している(図版12)。

P8出土土器 土師器の壺と鍋が出土している。

壺は、壺Gb(302)と壺Eaの口縁部片および体部の小片が出土している。302は、「く」字形をなす口縁部と体部がわずかに残存する。体部から口縁部外面にかけては、縦方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部を斜方向のヘラ削り、口縁部を横方向のハケの後、口縁端部が横ナデにより仕上げられている。壺Eaは口縁部の小片である。他に丸胴タイプの体部片が出土している。内面がヘラ削り、外側がハケにより仕上げられ、外側には煤の付着が認められる。

鍋は口縁部片(300)と体部片が出土している。300は鍋Aaに分類され、口縁部と体部の一部が残存す



第193図 建物群13

る。外面は、体部から口縁部にかけて縦方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部が横方向のハケの後横方向(左→右)のヘラ削りが施され、その後口縁部が横方向のハケの後横ナデにより仕上げられている。このほか体部片も出土しているが、300と同じく内面が横方向のヘラ削り、外側が縦方向のハケにより仕上げられている。

**P9出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は鉢(301)が出土している。301は鉢Baに分類され、完形に復元される個体である。丸底の底部に体部が半球形に立ち上がり、口縁部が短く外反し端部が丸くおさめられている。全体的な形態は整っていない。外面は、底部から体部にかけて不定方向のナデおよび指オサエにより仕上げられ、最後に口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、底部から体部にかけて横方向(左→右)のヘラ削りが施され、口縁部は横ナデにより仕上げられている。

須恵器は杯Aの底部片が出土している。

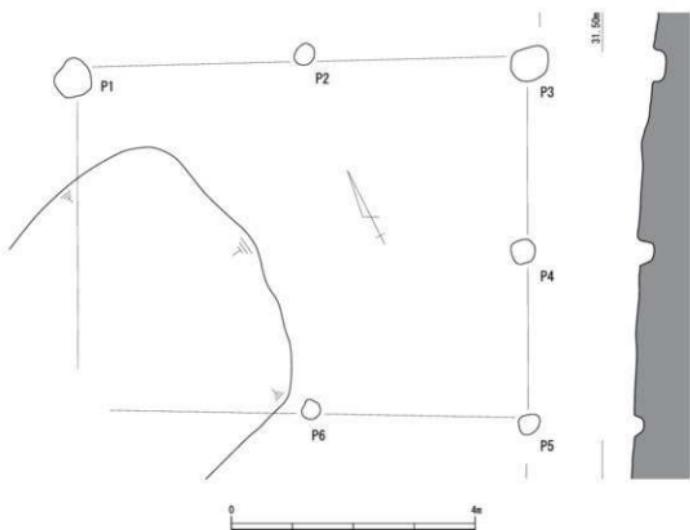
時 期 SB86との切り合い関係および出土遺物・棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### 14. 建物群13

南地区の北西部に位置する(第79図)。建物群10の南側、建物群14の西側、建物群16の北西側に位置する。5棟の建物(SB88~SB92)からなる(第193図)。

##### SB88(附表16)

検出状況 建物群13の北側に位置する(第193図)。SB92の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。建物全体が検出されているが、建物西隅は後世の攪乱を受けている。



第194図 SB88

**建 物** ほほ北西～南東方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の側柱建物である(第194図)。建物西隅が攪乱を受けており、1穴を欠く。柱通りは比較的良好であるが、北東側・南西側の桁行は平行しない。このため平面形は台形傾向にある。建物の規模は、北東桁行(P1-P3)で7.50m、南東梁行(P3-P5)で5.90mを測り、両者を基準とした建物の面積は44.25m<sup>2</sup>を測る。北東桁行を基準とした棟軸方向はN27°15' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表16の通りである。

**柱 穴** 柱穴の平面形は円形を基本形としている。一部P3・P4のように隅丸方形傾向の柱穴も認められる。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細紗～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表16の通りである。

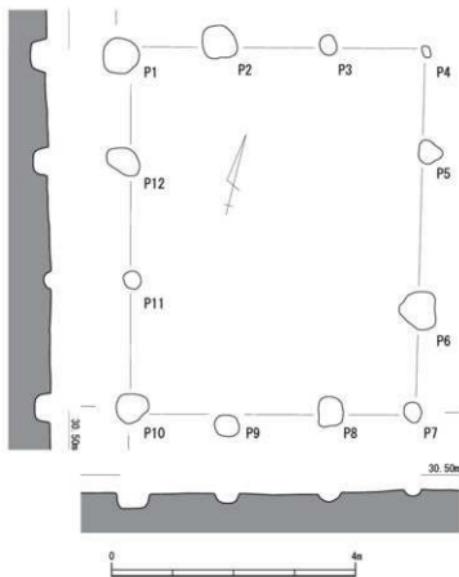
**出土遺物** 遺物は全く出土していない。

**時 期** 遺物が全く出土していないため、時期の特定は困難である。棟軸方向から判断して、南構Ⅶ期～Ⅷ期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB89(図版12 附表16・37)

**検出状況** 建物群13南西部に位置する(第193図)。SB90と当建物東側が平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** 南北方向に主軸をもつ梁行3間、桁行3間からなる側柱建物である(第195図)。建物平面は全体的に柱通りが良好で、整った長方形をなしている。建物の規模は、南梁行(P7-P10)で4.65m、西桁



第195図 SB89

行(P10-P1)で5.80mを測り、両者を基準とした建物の面積は26.97m<sup>2</sup>である。西桁行(P10-P1)を基準とした棟軸方向はN13°00'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表16の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。このなかで、北東隅柱は他より極端に小型である。柱穴の平面形は一定していないが、円形もしくは隅丸長方形類向のものが多く認められる。柱痕が検出された柱穴は認められない。埋土はいずれも黒褐色極細紗1層からなる。各柱穴の規模は附表16の通りである。

**出土遺物 P1・P5・P8・P10~P12**から土器が出土している(図版12)。

**P1出土土器** 土師器の鍋の口縁部片が出土している。内外面とも横方向のハケにより仕上げられている。

**P5出土土器** 土師器の甕の体部片が出土し、内外面ともナデにより仕上げられている。

**P8出土土器** 土師器の甕の体部片が出土し、内外面ともナデにより仕上げられている。

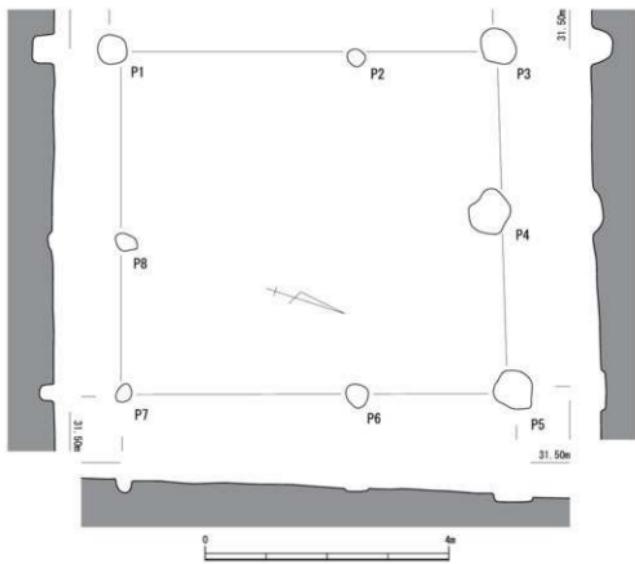
**P10出土土器** 土師器の甕の体部片が出土している。内面はヘラ削り、外表面はナデにより仕上げられ、外表面には煤の付着が認められる。

**P11出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は杯(303)と甕が出土している。303は口縁部のみ残存し、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。また内外面には赤彩が、外表面には煤の付着が認められる。甕は体部片が出土しており、内外面ともハケにより仕上げられている。

須恵器は杯の底部片が出土している。底部はヘラにより切り離されている。

**P12出土土器** 土師器の甕Gdの口縁部が出土している。

**時 期** 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。



第196図 SB90

## SB90(附表17)

**検出状況** 建物群13中央部西側に位置する(第193図)。SB91の北西側、SB92の西側に位置する。SB89と当建物西側が重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。また他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** ほぼ南北方向に主軸をもつ梁行2間、桁行2間からなる側柱建物である(第196図)。各辺とも柱通りは比較的良好で、建物全体の平面形は整っている。特に東西の桁行は同規模である。また東西桁行の中間柱の位置は、それぞれ北側に寄っている。建物の規模は、南梁行(P1-P7)で5.60m、東桁行(P5-P7)で6.40mを測り、両者を基準とした建物の面積は35.84m<sup>2</sup>である。東桁行(P5-P7)を基準とした棟軸方向はN17° 30' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表17の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。やや大型の柱穴(P1・P3～P5)と、小型の柱穴からなる。小型の柱穴の平面形は円形傾向にあるが、大型の柱穴については円形もしくは歪んだ形状をなしている。またP1とP3を除いては全体的に浅い傾向が認められる。どの柱穴においても柱痕は認められなかった。埋土はいずれも黒褐色極細砂～細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表17の通りである。

**出土遺物** 全く出土していない。

**時 期** 出土遺物から時期を特定することは困難である。棟軸方向から判断して、南構Ⅷ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

## SB91(附表17)

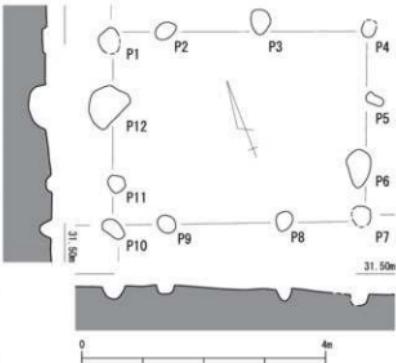
**検出状況** 建物群13中央部南端に位置する(第193図)。SB90の南東側、SB92の南西側に位置する。他の建物との切り合いは認められず、全体が検出されている。

**建 物** 東西方向に棟軸をもつ梁行3間、桁行3間の側柱建物である(第197図)。北桁行と東梁行の柱通りがやや乱れている。一方両梁行の規模は同じである。建物の規模は、北桁行(P1-P4)で4.25m、西梁行(P1-P10)で3.10mを測り、両者を基準とした建物の面積は13.17m<sup>2</sup>を測る。東梁行(P4-P7)を基準とした棟軸方向はN22° 00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表17の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。ただし全体的に検出面からの深さが20cm以下と浅い傾向にある。柱穴の底部がわずかに残存していた結果と考えられる。このため平面形についても、歪んだ形状のものが目立つ傾向にある。またP1・P4・P7については他の柱穴に切られている。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表17の通りである。

**出土遺物** P1から須恵器の小片が出土している。器種の特定も困難であるが、胎土の特徴から8～9世紀代と考えられる。

**時 期** 出土遺物から判断して、南構Ⅷ期～Ⅸ期に位置付けられる(第7章第1節)。



第197図 SB91

## SB92(図版12 写真図版74 附表17・37)

検出状況 建物群13南東部に位置し、SB90の東側、SB91の北東側に位置する(第193図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

建 物 北東－南西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の側柱建物である(第198図)。柱通りは比較的良好であるが、南北の桁行は平行ではない。建物の規模は、南東桁行(P5-P7)で6.20m、北東桁行(P3-P5)で4.40mを測り、両者を基準とした建物の面積は27.28m<sup>2</sup>を測る。南東桁行を基準とした棟軸方向はN64°00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表17の通りである。

柱 穴 柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形傾向にある。柱穴の規模についても、P7を除いてほぼ同規模の柱穴から構成されている。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表17の通りである。

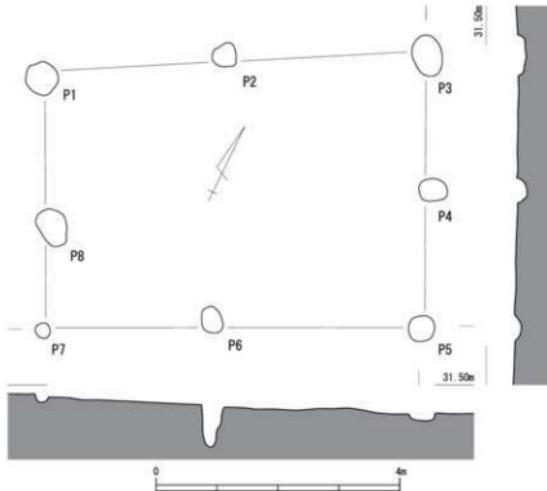
出土遺物 P3とP5から土器が出土している(図版12)。

P3出土土器 土師器の杯A(305)・碗(306)・壺が出土している。

305は杯A4に分類され、底部から口縁部にかけて残存する。底部は回転糸切りにより切り離され、体部外面は回転ナデにより仕上げられている。底部外面全面に煤の付着が認められる。306は底部から体部にかけて残存する。底部は回転糸切りにより切り離され、体部外面および底部から体部にかけての内面はともに回転ナデにより仕上げられている。内外面とも赤彩が認められる。壺については体部の小片が出土している。内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられ、外面には煤の付着が認められる。

P5出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は杯の底部片が出土している。外面に赤彩が認められる。須恵器は杯と壺(304)が出土している。杯は体部の小片で、焼成が不十分である。304は底部から体部にかけて残存し、体部は直線的に立ち上がる。底部はヘラにより切り離され、ナデが加えられている。体部は内外面とも回転ナデを基調とし、外面底部付近には回転ヘラ削りが施されている。

時 期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅳ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。



第198図 SB92

## 15. 建物群14

南地区北半中央部に位置する(第79図)。建物群11の南側、建物群13の東側、建物群15の西側にあたり。6棟の建物(SB93～SB98)からなり、SB98を除いては、建物相互の平面的重複が認められる(第199図)。



第199図 建物群14

## SB93(附表17)

**検出状況** 建物群14北部中央に位置し、SB95・SB96の西側に位置する(第199図)。建物南側がSB94と平面的に重複し、P6がSB94のP2に切られている。他の造構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** ほぼ南北方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の側柱建物である(第200図)。桁行・梁行とともに平行関係にあり、平面形は全体的に整った長方形をなしている。ただし東桁行の中間柱を欠く。建物の規模は、東桁行(P3-P4)で4.80m、北梁行(P1-P3)で3.00mを測り、二者を基準とした建物の面積は14.40m<sup>2</sup>である。東桁行を基準とした棟軸方向はN3°00'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表17の通りである。

**柱 穴** 東桁行の中間柱を除く全ての柱穴が検出されている。ただし、P1・P3・P6については他の柱穴に切られている。

埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表17の通りである。

**出土遺物** P2から土師器の壺が出土している。体部片と頭部片が出土しており、体部片は内外面ともハケにより仕上げられている。いずれも小片のため図化できなかった。

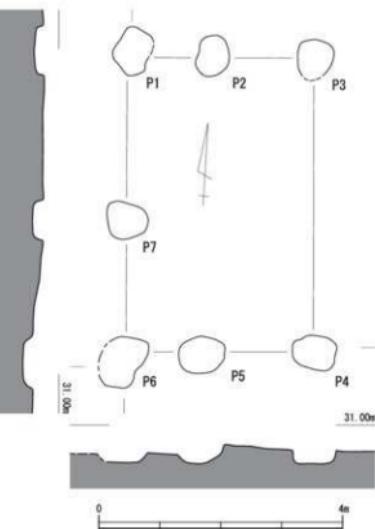
**時 期** SB94との切り合い関係および出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB94(附表17)

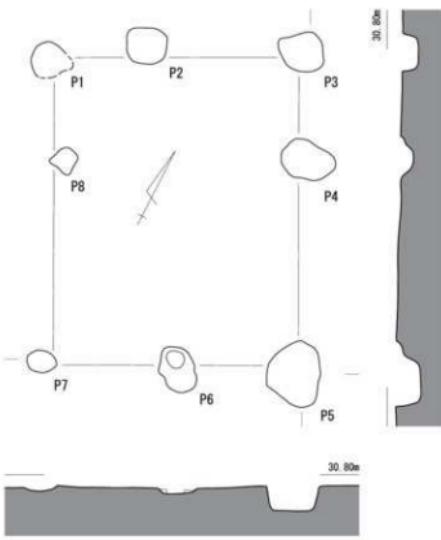
**検出状況** 建物群14中央部に位置する(第199図)。SB96の西側に棟軸方向をほぼ同じくして隣接する。SB93と一部重複し、P2がSB93のP6を切っている。この他SB97と平面的に一部重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかつた。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** 北西-南東方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の側柱建物である(第201図)。全体的に整った平面形をなし、柱通りも比較的良好である。ただし、両桁行の中間柱は北西側へ寄った位置にある。建物の規模は、南東梁行(P5-P7)で4.15m、北東桁行(P3-P5)で5.30mを測り、两者を基準とした面積は21.99m<sup>2</sup>である。北東桁行(P3-P5)を基準とした棟軸方向はN27°00'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表17の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されてい る。



第200図 SB93



第201図 SB94

P7・P8を除いては比較的大型の柱穴である。平面形は、P7・P8を除いては隅丸長方形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。P6のみ柱痕が検出されている。各柱穴の規模は附表17の通りである。

出土遺物 P6から土師器の楕と甕が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。楕は平高台をなす底部片が、甕は甕Eaの口縁部片が出土している。

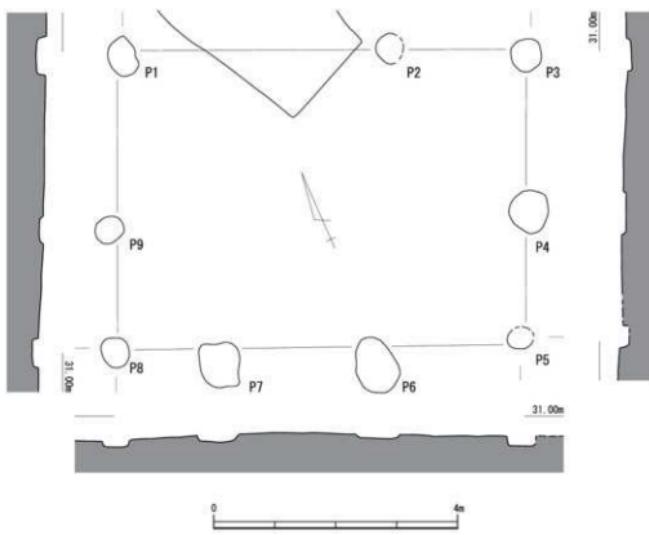
時 期 SB93との切り合い関係および出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅸ期に位置付けられる（第7章第1節）。

#### SB95(図版12 写真図版74 附表18・37)

検出状況 建物群14の北東部、SB93の東側に位置する（第199図）。SB96と平面的に重複し、P2とP5がSB96のP4とP7に切られている。北東部の一部が攪乱を受けているが、建物全体が検出されている。

建 物 ほぼ東西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間の隅柱建物である（第202図）。ただし北桁行の1穴（P1-P2間）を欠く。全体的に柱通りが良好で、建物の平面形は整った長方形をなしている。特に桁行の規模は、南北とも同規模である。建物の規模は、南桁行（P5-P8）で6.60m、西梁行（P1-P8）で4.80mを測り、両者を基準とした建物の面積は31.68m<sup>2</sup>である。西梁行を基準とした棟軸方向はN 23° 45' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表18の通りである。

柱 穴 P1-P2間については後世の攪乱を受け、柱穴を検出することはできなかった。P6を除いては、平面形が隅丸長方形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また、柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表18の通りである。



第202図 SB95

出土遺物 P5・P6・P9 から土器が出土している(図版12)。

P5出土土器 土師器の杯Aの底部片が出土している。底部は平高台をなしている。

P6出土土器 土師器と須恵器が出土している。

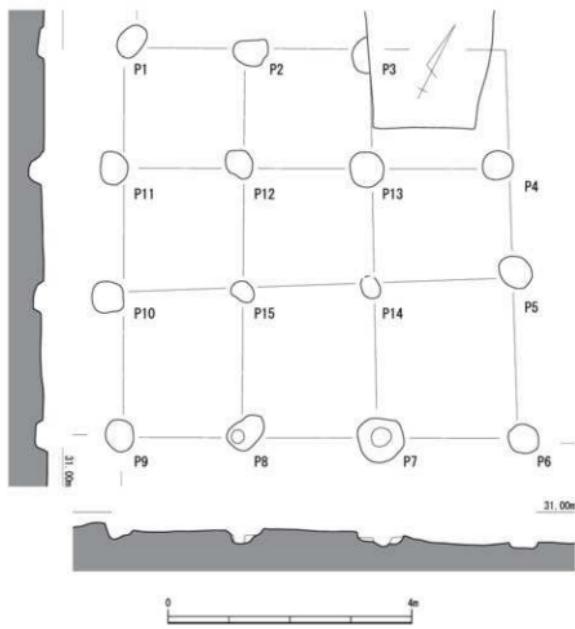
土師器は杯・皿(307)・甕が出土している。杯は体部片と底部片が出土している。体部片は小片であるが、精良な胎土が特徴的である。底部片は2点出土しており、1点は平高台の一部が出土している。もう1点は糸切り痕が認められる。皿は完形に近い307が出土している。307は皿Ad4に分類され、手づくね整形を基調として仕上げられている。外面は不定方向の、内面は横方向のナデにより仕上げられている。底部内面は同一方向のナデにより仕上げられている。

甕は口縁部片と体部片が出土している。口縁部片は甕Eaに分類されるもので、比較的大型の甕である。体部片は丸胴タイプに分類されるもので、内面がヘラ削り、外側がハケにより仕上げられている。

須恵器は甕の体部の小片が出土している。

P9出土土器 須恵器の皿A(308)が出土している。308は皿Acに分類され、口縁部が斜方向に直線的である。底部は回転ヘラ切りにより切り離され、口縁部は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。底部内面はナデにより仕上げられている。全体的に胎土が粗い傾向にある。

時期 SB96との切り合い関係および出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ期～Ⅷ期に位置付けられる(第7章第1節)。



第203図 SB96

## SB96(図版12 写真図版39 附表18・37)

**検出状況** 建物群14北東部、SB94の東側に位置する(第199図)。SB95と平面的に重複し、当建物のP4とP7がSB95のP2とP5をそれぞれ切っている。また北西隅の1穴(P1)はSB93の東側桁行上にある。北東隅の1穴を欠くが、他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** 北東－南西方向に主軸をもつ梁行3間、桁行3間からなる総柱建物である(第203図)。北西側と南東側の桁行は柱通りも良好で平行関係にある。一方梁行については柱通りに乱れが認められ、平行関係はない。このため、全体の平面形はわずかに台形傾向にある。中央桁行においては柱通りは比較的良好である。

建物の規模は、南梁行(P6-P9)で6.65m、西桁行(P1-P9)で6.45mを測り、両者を基準とした建物の面積は42.89m<sup>2</sup>である。南梁行(P6-P9)を基準とした棟軸方向はN63°30' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表18の通りである。

**柱 穴** 北隅の1穴を欠く以外全ての柱穴が検出されている。比較的良好に残存する柱穴の平面形は、全体的に隅丸長方形傾向にある。またP7とP8においては柱痕が検出されている。埋土はいずれも黒褐色極細砂1層からなり、基盤層の黄褐色細砂～極細砂がブロック状に含まれている。各柱穴の規模は附表18の通りである。

**出土遺物** P7～P10・P12・P13・P15から土器が出土している(図版12)。

**P7出土土器** 土師器の壺の体部片が出土している。内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられ、外面上には煤の付着が認められる。

**P8出土土器** 土師器の皿(309)が出土している。309は皿Ad2に分類され、完形に復元される個体である。平底の底部から斜方向に口縁部が立ち上がる。口径に対して器高が高い傾向にある。底部から体部にかけての外面を指オサエによる整形後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。底部内面は一定方向のナデにより仕上げられ、体部にかけての変換部は強い指ナデが施されている。

**P9出土土器** 土師器の杯Aの底部片が出土している。

**P10出土土器** 土師器の壺の体部片が出土している。長胴タイプに分類されるもので、内面はヘラ削り、外面上はハケにより仕上げられている。

**P12出土土器** 須恵器と黒色土器が出土している。須恵器は杯Aと壺が出土している。杯Aは底部の小片が出土している。壺は体部片が出土しており、外面は叩き整形により仕上げられ、内面には當て具痕が認められる。黒色土器は体部の小片が出土しているが、器種の特定は困難である。内面のみ黒化している。

**P13出土土器** 土師器の碗と壺が出土している。碗は平高台をなす底部片が出土している。内面見込みが一段落ち込むタイプである。壺は体部の小片が出土しており、内面はヘラ削りにより仕上げられている。

**P15出土土器** 須恵器の杯の体部片が出土している。

**時 期** SB95との切り合い関係および出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅸ期に位置付けられる(第7章第1節)。

## SB97(附表18)

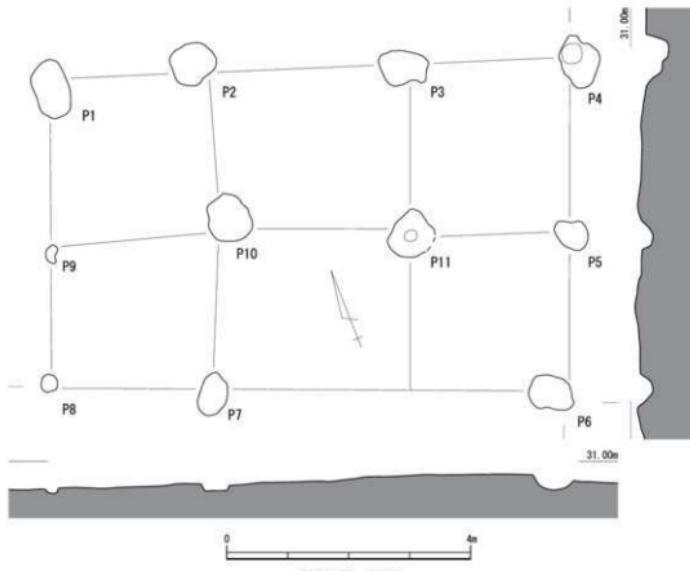
**検出状況** 建物群14中央部西側に位置する(第199図)。第2次調査と第3次調査の成果の合成後に明らかとなった建物で、SB98の北西側に位置する。SB94の一部と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** 東西方向に主軸をもつ梁行2間、桁行3間からなる総柱建物である(第204図)。東西の梁行は平行関係にあるが、南北の桁行については平行関係なく、全体の平面形は台形傾向にある。さらに中央桁行においても柱通りは良好ではない。また南桁行においてP6-P7間の1穴を欠く。建物の規模は、東梁行(P4-P6)で5.40m、南桁行(P6-P8)で8.20mを測り、両者を基準とした建物の面積は44.28m<sup>2</sup>である。南桁行(P6-P8)を基準とした棟軸方向はN68°00'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表18の通りである。

**柱 穴** 南桁行において1穴を欠く以外、全ての柱穴が検出されている。柱穴の平面形は全体的に不定形であるが、隅丸長方形傾向が伺える。また、P8とP9は極端に小規模である。他は60cm大から80cm大とほぼ同規模である。検出面からの深さについても、P4が38cmと明らかに深く、他は29cm以下と浅い傾向にある。この他P4とP11においては柱痕が検出されている。埋土はいずれも黒褐色細砂1層からなり、基盤層の黄褐色細砂～極細砂がブロック状に含まれている。各柱穴の規模は附表18の通りである。

**出土遺物** P2～P5・P11から土師器が出土している。いずれも小片のため固化できなかった。

P2出土土器 売の体部片が出土している。内外面ともハケにより仕上げられている。



第204図 SB97

P3出土土器 杯の体部片が出土している。

P4出土土器 梗の口縁部片が出土している。

P5出土土器 杯と甕が出土している。杯は体部片と口縁部片が出土している。体部片は内外面に赤彩が認められる。甕は体部の小片が出土している。

P11出土土器 甕の体部片が出土している。

時期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ期～Ⅷ期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB98(附表18)

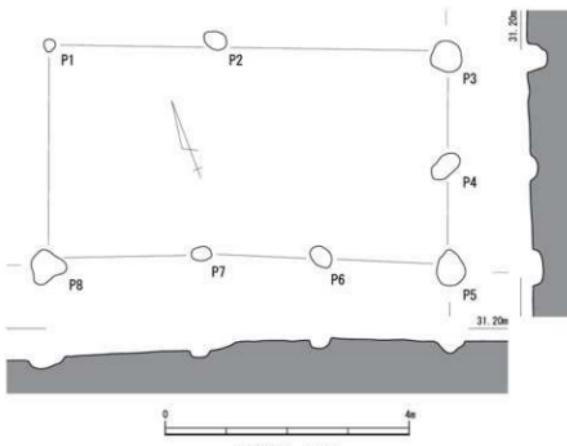
検出状況 建物群14の南端部、SB97の南東側に位置する(第199図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

建物 北西～南東方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間の側柱建物である(第205図)。建物全体が検出されているが、北側桁行と西側梁行においてそれぞれ1穴を欠く。柱通りは比較的良好で、全体的に整った平面形をなしている。建物の規模は、南桁行(P5～P8)で6.60m、東梁行(P3～P5)で3.50mを測り、両者を基準とした建物の面積は23.10m<sup>2</sup>である。東梁行を基準とした棟軸方向はN21°00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表18の通りである。

柱穴 柱穴の平面形は全体的に不整形である。柱穴の規模についても、P3・P5・P8のように大型のものと、他の小型のものと、その差が顕著である。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表18の通りである。

出土遺物 P1から土師器と須恵器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。土師器は甕の体部片が出土し、内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。須恵器は梗と杯Aが出土している。梗は口縁部を中心に残存し、器壁が薄く仕上げられている。杯Aは底部を中心に残存している。

時期 棟軸方向および出土遺物から判断して、南構Ⅶ期～Ⅷ期に位置付けられる(第7章第1節)。



第205図 SB98